

えでぴあ

立川と語ろう 立川に生きよう

May 2020

Écoutez Bien Vol.36 No.422

5

春、立川人は今…



七軒家の隣は八軒

案内人：豊泉喜一氏

前号で七軒家のことを書きましたが、そのすぐ東隣に「八軒」と云う地域があります。この地域は昔から砂川村の地域ですが、享保5年(1720)に開削された芋窪新田分水を利用して、現東大和市芋窪村の人達が開拓したところで場所は現在の立川通りに沿った栄町2丁目～3丁目付近です。入植した芋窪の人達は親村の芋窪から勧請した愛宕神社を氏神として祀っています。

この神社は、神主はいませんが、砂川の阿豆佐味天神社の官司が兼務しており、現在は栄町地区の氏神として、元日には初参りの参拝も多く、秋には賑やかなお祭りもおこなっています。菩提寺は隣の中藤新田にある観音寺です。

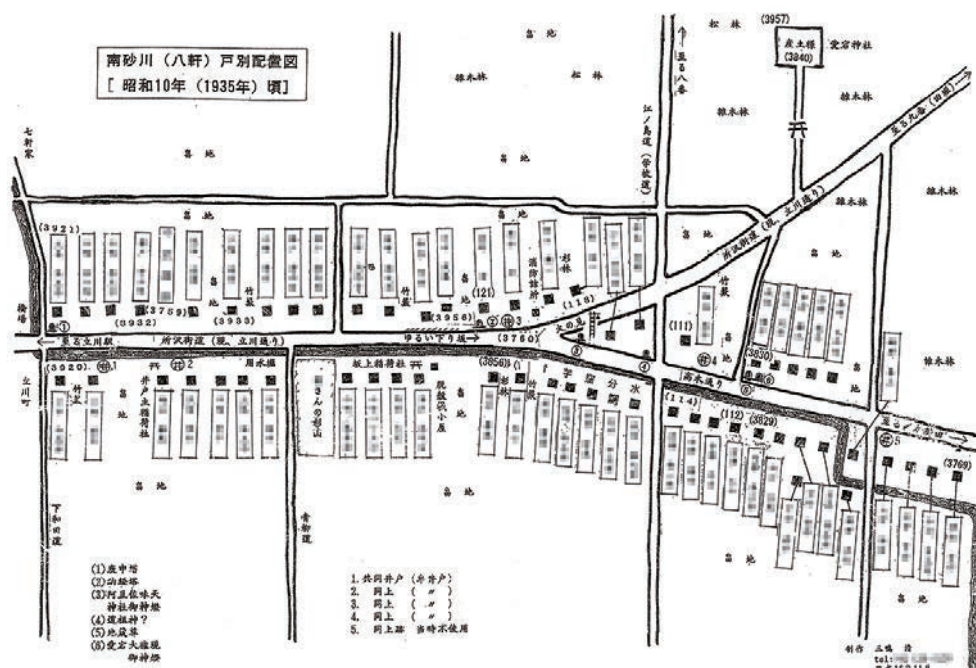
この区域は上組、中組、下組に分かれていますが、不思議なことに、現東大和市芋窪の出身者で構成されている上組と下組に挟まれた中組は、なぜか氏神も菩提寺も違う砂川村出身の八軒の家を中心に構成され、この人達は今でも砂川村の鎮守、阿豆佐味天神社の氏子であり、中組の中央部に阿豆佐味天神社の常夜灯があります。また菩提寺もかつては砂川の流泉寺でしたが、現在は芋窪新田の菩提寺観音寺の檀家になっています。

この中組は、明治6年に新政府が施行した地租改正令に伴って付けられた地番の宅地地番が、上組下組の家々が3千番地台なのに、1キロ以上離れた五日市街道八番組の110番地から中組の宅地に飛び、111番地から砂川村出身と見られる121番地まで地番が付けられ、再び1キロ以上飛んで八番組の122番地に戻ると云う何とも不可思議な番地が付けられています。

本来分水名は「芋窪新田分水」であり、入植者の出身地、氏神、菩提寺などから考えても、本来地名は「芋窪新田」と云うべきところ、なぜかこの名称は使われず、砂川村から入植した「八軒」が地名になっていました。

この芋窪新田、八軒新田、七軒家新田の開発を支えて来た芋窪新田分水は、戦後間もなく通水が止まり、昭和四十年ごろに埋め立てられ、その痕跡は見られませんが、現在高松町熊野神社近くの旧道脇に「玉川上水砂川用水芋久保分水路跡」の小さな記念碑(前号写真参照)がひっそりと建っています。

この八軒の東側、国分寺市分ですが「五軒家」と云う地域もあります。このような地名は、未だ地名のない原野を開拓する新田開発では、最初に入植した人達の家数や開発者の名前が地名になった場所が多く見られます。



南砂川「八軒」戸別配置図(昭和十年頃) 画像は一部デジタル処理をしています。



現在の愛宕神社



阿豆佐味天神社御神灯(地図の三差路の交差点にある)

ここにも 元気な人たちがいる

あれから10年

ドーバーばばあの「どうだ〜?ばばあ」

仕事をしている、親の介護をしている、家族のお世話をしている、立川周辺に住むそんな普通の女性たちが6人集まって、2010年ドーバー海峡横断リレーを成功させた。当時その記録を撮り映画にした中島久枝さんも父親の介護をしていた。あれから10年、彼女たちはこの秋ドーバーを目指し、そして中島さんは再びその記録を撮っている。

——「ドーバーばばあ」織姫チームのリーダー大河内二三子さんは、ドーバー海峡4回目ですかね。えくてびあんで1999年1月号で大河内さんのお話を掲載してまして、その時が2回目でした。

中島 そうですね。リーダーと監督は何度も経験されていますが、メンバーは入れ替わっています。

——「ドーバーばばあ 織姫たちの挑戦」を撮られたのが2010年。当時メンバーは54歳から67歳、すでに高齢でした。「あれから10年」という映画を制作中とかがいましたが、この10年は大きいですよ。

中島 大きいですよね。みんなどれだけ変わったか(笑)。それぞれの人生にもいろいろあったんですよ。それは映画の中でご覧ください(笑)。



——なるほど。大河内さんは前回、肩の腱が切れていたそうですね。

中島 私は後から聞いたのですが、びっくりしました。アドレナリン出っ放しで、泳いでいる時は痛さを感じなかったらしいですよ。



——普通のオバサンのはずなんだけど、すごすぎる。そういえば、織姫さんたち、サプリメントのCMでテレビに出演されてますよね。

中島 普通のオバサンがこんなにやれちゃうという広告塔ですね(笑)。

——ドーバー海峡は水温が低いんですよね。天候に左右されて、泳げなくて帰国することもあると聞いています。

中島 10年前もそうでした。行けば泳げるなんて甘いところじゃない。今日か明日かって天気を見ながら待つわけです。泳げないで帰るのは辛いですから、その不安な日々も記録しましたね。



——ほとんど中島さんが撮影されているのですか?

中島 はい。ほとんどではありませんが。今回は、ボランティアで参加してくれている若者と日本での撮影を、ドーバーはプロのカメラマンをお願いするつもりです。



——練習に練習を重ねてきて、今年ドーバーはいつ渡る予定ですか?

中島 9月なのですが、心配です。果たしてドーバーに行けるかどうか。世界中がコロナウイルスのニュースで大変なことになっています。でもばばあたちはそんなものには負けませんよ。期待しててください。映画の中にはたくさんエピソード、ドラマ、人間らしさ、苦悩や喜び、いろいろなものが詰め込まれています。公開をどうぞ楽しみにしてください。

——すごいシニアの集まりですから、「元気な立川」の代表として期待しています!



友生堂時計店 上田政雄さん

高松町シネマ通りにある時計屋さん。昭和32年にこの場所で開業しました。当時のシネマ通りは超がつくほどの繁華街。基地から来る米兵を相手に商売する人たちが軒を連ねていたそうです。まったく変わってしまったシネマ通りで、淡々と仕事をする姿は、世の中に何があっても変わらない姿勢です。



宮崎彩乃さん

立川市と社協の助成金をいただいて、立川を盛り上げるべくマップ作りに奮闘中。3月にできたマップは第一弾、一番町や西砂町、砂川辺りを案内しています。宮崎さん、先ごろ「立川の農」写真コンテストで立川市長賞を受賞されました。いつもいつも地元立川のことを考えています。いろいろな人とさりげなく繋がって、強要しないところがこの方のいいところ。みんなで立川を盛り上げる、その中心のひとりです。



狭山園 池谷香代子さん

お茶屋さんの3代目。日本語以外に3か国語も話す国際派。外国人相手に日本茶の魅力を伝えることに一生懸命な彼女が、この時期、日本人の小学生にも日本の文化と伝統を伝えていました。急須のこと、お茶碗のこと、お茶のこと、海外の生活が長いからこそわかる日本文化の素晴らしさ。自粛後はオンラインで。



三上鯉節店 三上康子さん

突然の公立学校の休校。給食が途絶えました。立川市、昭島市、日野市の全小中学校に鯉節を納める三上鯉節店では、削ったばかりの鯉厚削りが冷凍庫に高く高く積まれていました。鯉節は生きています。冷凍庫に保存しても3か月。昭和9年の創業以来、こんなことは初めてです。元気な店主 三上康子さんのSNS発信で、期間限定格安でお客様にお分けしたそうです。



カフェ cocokara 加藤友里恵さん

シネマ通りにあるカフェです。学校がお休みになったことでお昼ご飯に困った親子さんのために、給食と同じくらいの価格でお弁当を作っています。給食とは違うけれど、お母さんのお弁当のような温かさが詰まっています。お姉さんの前田美由紀さんとふたりで、人と人を温かく繋いでいきたい、できることを精一杯誠実に、がふたりの信条。現在はハンドメイドマスクも販売中。



元気に楽しく、立川人

ピンチはチャンス、どんな時も どんなことも

新型コロナウイルス感染症の影響で、動きが停まってしまったかに見える世の中。特に飲食店はどこもみんな、「忍」の一字。

いつも通りではない立川。「死活問題」という言葉も聞こえていました。でも、こんな世の中でも何か役にたっていこう、街を盛り上げる一助になろう、そんな人たちの活動を拾ってみました。これが立川の底力。

菊川園 森田さんご夫妻

「人通りが少ないよ～」と菊川園の森田さん。諏訪通り商店街が賑わっていた頃からのお茶屋さん。通りの変遷をずっと見てきたそうですが、こんなに人がいないのは初めて。それでもいつもと変わらず、ニコニコと通る人に声をかけ、道を掃き、少なくとも物販屋さんの暖簾を守っています。お二人の笑顔に救われます。



洋菓子舗 茂右衛門

志村恭代さん

砂川九番交差点近くの一方通行。「こんな所で、って言われちゃうんです」と立地をおっしゃいます。が、いわゆる「きれい」「かわいい」ケーキとは一線を画す個性なお菓子たち。お酒たっぷりだったり、スパイシーだったり、エスニック調だったり。でもハマるとハマってしまう。立地がどうであろうと、世の中がどうであろうと、おいしい味を作り続けていますが、現在はお休み中。営業再開を待っている人は多いです。



おたけ工房 竹村浩一さん

自宅は立川、工房は拝島にありますが、休校になった子どもたちが工作をしたらどうかと、柴崎町2丁目の「きらら」でおたけ工房を開いていました。道すがら、子どもたちが立ち寄って木っ端で作品を作っていました。いつの間にか童心に返った大人も参加。



和菓子司 井筒屋 中里吉雄さん

昭和8年創業の和菓子屋さん。吉雄さんは二代目です。「父の頃は冠婚葬祭や季節の行事には和菓子が必要で、電話がないから自転車で走り回って大変だった。今はそんなことはないけれど、和菓子屋も減ったね」と。

そう言いながら、毎日毎日和菓子を作り続けます。街にどんな風が吹こうとも、淡々と、粛々と。



オレが生まれた日

語り：鈴木 武 氏



'56 オールズモビル スーパー88 'ホリデークーペ

[立川の風景 昭和色アルバム その6] 117ページ

1963年12月30日。オレは国立立川病院^{こくりつ}で生まれた。まさにその日に撮られた写真。車の後ろに写りこむ国立病院。見えないけれど、オレもここに写っているわけだ。基地に面した病院で生まれ、基地のある立川で育った。古すぎる立川は語れない。新しい立川に興味はない。オレの中では、昭和40年～50年代の立川こそが立川で、多くの大人が蓋をしたがってきた立川、アメリカのいた立川のもつ雰囲気が好きだ。「立川市民祭」というお祭りがあって、そこにアメリカ人も出店していた時代を知っている年代は少なくない。小・中学校の窓は二重ガラスで防音され、真上を飛行機が飛び交っていた。アメリカも変わった。今になってわかったことは、オレの好きなアメリカは基地の中のアメリカで、やっぱり昭和40～50年代のアメリカだったんだな。

歯科医でアメリカ兵の車を追いかけていた高木紀男先生の写真集「タチカワエアベース カーウォッチング(けやき出版)」を初めて見た時、ものすごく感動した。そこにはオレの好きな立川とアメリカが溢れていた。オレは思った。絶対先生の写真集を作らなければならない! この度、高木先生のご協力を得て『立川の風景 昭和色アルバム その6 アメリカ兵の車を追いかけた立川ノスタルジー「緑川通りの1960年代を紡ぐ」高木紀男・写真・編』を刊行。オレの中の立川をまたひとつ、形にすることができた。ありがたい話だ。



鈴木 武 氏

株式会社立川印刷所 代表取締役社長。昭和5年柴崎町に創設された印刷所の三代目。昭和の立川をサブカルチャー的に語らせたら右に出る者はない。